

第 44 回目 新しい人を身に着る (16)

親子関係の教え(2) ——境界線(バンドリズ)の取り方

はじめに

●前回到続いて親子関係について考えます。家庭における夫婦関係を考えるにしても、親子関係を考えるにしても、あるいはそれ以外の関係を考えるにしても、大切なことは、5章21節にあるように、

- a. 「キリストを恐れ尊んで互いに従う」ということが大原則です。
- b. それは互いに仕え合うことであり、ゆずり合うことであり、そして相手を立てることです。
- c. そしてその意味するところを一言で言うならば、「人格の尊厳」ということに尽きます。

●親子関係において「人格の尊厳」ということを考えて行く時、特に子どもの人格の尊厳ということをもどのように受けとめるかが大切です。「子の人格を尊厳する」という定義として、「親から名を与えられた子が、決して親の所有物とされることなく、また、親の夢を実現する道具とされることもなく、あくまでも、神からゆだねられた存在として認められ、やがて子が自らの意志で、人として自立していく権利が尊重されるということです。」

●このことを、親が、子どもが与えられる前によく知っておくことがとても大切です。人間のほとんどの問題は人格に抵触するものです。親が自分の子どもを育てる前に、子どもとどう向き合うか、その基本的な姿勢をしっかりと持っているか、もっていないかで、どのような子どもが育つかが決まってくると思います。親の責任とはあくまでも、神からゆだねられた子どもが、自分とは異なる人格を持つ存在であることを理解することです。たとえば、子どもが自分の意志を表すことに対して、つまり、「いやだ」ということばを慎重に受けとめること、それを、単に、反抗しているとか、わがままだと断定して、親の面子を立てるために、断固として子どもをねじ伏せることがないようにすることです。特に、3、4歳時に見られる反抗期は、やがて思春期に訪れる本格的な反抗期の予兆です。親は自分に与えられている権威の適切な限界を知っていなければ、おそらく、力で子どもを無理やり降伏させてしまうことができます。そうした支配のもとで育つ子どもは、やがて精神的に大きな問題を引き起こすことが報告されています。

●前回はその一例として、舟山紀というクリスチャンが書いた「夢砕き」という子育て失敗の経験を記した本を紹介しました。反抗期を通らない、いわば良い子は親から見るととても育てやすく、周りからも「いい子だ」と受けとめられますが、実は、そこに大きな落とし穴が潜んでいることを教えてくれます。この本に登場する長男もそのような子でした。

●裕福な家庭環境でしたが、父親不在のゆえに起こりやすい、母子癒着関係にあった長男が、3、4歳時の反抗期を通ることもなく、完全さを求めるいわば母親の強迫的な性格に同化しながら、「良い子」として育っていく。成績も優秀で、名門の小中高を経ながら、母親の期待の星となっていく。ところが、一流大学受験の失敗を契機に、一気に母親に対する言葉の暴力がはじまります。息子に大きな期待をもっている母親としては、その期待を

אגרת שאול אל האפסים

裏切る息子の言動はとうてい認められません。なんとかして大学に行かせようとし、なんとか元の息子に戻ってほしいと母親も必死になります。しかし母親の必死のパワーが強くなればなるほど、息子もよりパワー・アップして対抗するということになり、やがては家庭崩壊の極限状況へと進んでいったのです。

●しかし、数年たって、子どもの暴力もおさまり、正常に戻ったと思われたとき、その子どもが反抗することによってすべての力を果たしてしまった自分が、完全に親に依存している自分、自分の内に新しい何かをしていく力が自分の内に無いことを知って、愕然とし、生きる希望を失い、そして最後は、これ以上、親に迷惑をかけたくないという思いから、自らのちを断つという結末で終わってしまうわけです。

●この問題はなんだったのでしょうか。—それは、母親自身が、自分が愛だと思って子どもにしてきたことが、愛に似て非なるもの、つまり、子どもに対する過保護、過干渉という、いわば子どもに対する執拗な執着でしかなかったことがそもそもの問題でした。どこからどこまでが自分であるのか、その線引きができずに、母と子どもとが癒着して、その境界線が見えなくなっていく恐ろしさ、しかも、その問題に母親自身がなかなか気づくことができないところに、この話の悲劇があります。

●過保護も過干渉(子に対する過度の支配)も、実は、誤ったかわり方の裏表です。子どもに間違っただけの選択をさせまいとして、厳しい規制や制限を設けること—たとえば、怪我する、風邪を引くからということで外で遊ぶことを制限したり、悪いことをおぼえるからとよその子どもと遊ばせなかったりすること、確かに、子どもを守り、管理することは親の責任ではありますが、子どもが失敗する余地を残しておくことが大切なのです。なぜなら、人は失敗する経験を通して成長し、多くのことを学んでいくからです。成熟していくからです。それが親によって過度に支配され、管理されることによって、失敗すること、挫折することに弱い人間が作られてしまいます。舟山さんの長男が一流大学入試の失敗から家庭内暴力がはじまったのは、失敗や挫折の経験をさせてこなかったことが原因です。失敗をあえてさせることは、やがて、その子が新しいことにチャレンジしたり、冒険したり、創造的なことをしていくために必要な訓練なのです。

●そのように考えてみると、子どもの反抗期というプロセスは、神が子に対して与えている「人格の尊厳が親によって脅かされることのないように」との、神からの警告、警鐘のように思えてきます。親が、あるいは周りの者が、このサインを正しく受け止めることができるならば、子どもは健全な成長をとげることができ、やがて、親も子から尊敬されることになるはずなのだと思います。しかし、このことが正しく受けとめ切れない所に、家庭における親子関係のさまざまな問題が発生してくるようです。もう一度、聖書が教えている親子のあり方を見てみましょう。

●特に、エペソ6章4節にある「父たちよ(母親もこの呼びかけの範疇に当然ながら入っています)。子どもをおこらせてはいけません。」とのことば。私は、長い間、このみことばが意味することが良く分かりませんでした。この言葉が真に意味するところはこういうことではないかと思います。つまり、子どもの人格の尊厳を正しく理解してかわらなければ、やがて「子をおこらせる」事態になるだけでなく、子ども自身がスポイルされてしまうと(だめになっしまうこと)ということではないかと思います。家庭内暴力はそのひとつの現われ(現象)ではありません。親の子に対する過保護、過干渉がもたらした、子のクーデターなのです。子育ての中に潜む、親た

ちの罪深さや弱さについてふれましたが、今回もさらにこのことを考えてみたいと思います。かかわりのテーマは、親子の関係だけでなく、教育の世界に携わる者たちにも及ぶ重要な問題です。

1. 聖書における子育ての例

●「親になる」ということは本当に大変なことです。結婚してから、あるいは結婚前に、子どもがお腹の中にできて(それも神が与えられるわけですが)、自動的に親の立場に立たせられてしまうわけですが、親になる者が必ずしも、はじめから立派な親としての務めを果たせるわけではありません。また、社会的に高い地位にある者、高い水準の教育を受けた者が、必ずしも、子どもの養育に成功するというものでもありません。むしろ失敗することが多いということを、聖書が教えています。そのような例がいくつでもあります。

●聖書の中には、神から祝福された人であっても、大いなる働きを与えられた人であっても、こと自分の子の養育においては成功していない例がいくつもあります。以下は、子どもをスポイルした父親たちの例です。

(1) 大祭司アロンの場合

●息子たち(ナダブとアビフ)は、厳禁されていた異火をささげて神にさばかれて死にました。火は常に祭壇から取られなければなりませんでした。いわば日常的になされている神への行為において、聖なるものに対する「狎れ」(なれ)がありました。最も聖なることに対して厳しくあるべき立場にある大祭司の息子たちが、聖なるものに対する「狎れ」を暴露する事件でした。狎れの罪に対する息子たちの死に対して、アロンはただ黙って受けとめざるを得ませんでした。このとき、親のアロンに対して直接的に罪は問われていませんが、アロンは沈黙の中で十分な痛みを感じたはずで

(2) 最後の士師、祭司エリの場合

●祭司エリの二人の息子の名はホフニとピネハス。彼らは共に不貞を働き、最上のささげもので自分たちを肥やしていました。父エリはそのことを知りながら、息子たちを戒めなかったとあります。このときは神の怒りにふれ、父も息子たちもさばかれました(サムエル第一、4章)。過保護。

(3) 預言者サムエルの場合

●預言者サムエルの二人の息子の名は、ヨエルとアビヤ。彼らは父の道に歩まず、利得を追い求め、わいろを取り、さばきを曲げていたとあります。父サムエルは各地での神の仕事に忙殺され、家庭での子どもの教育に時間を取ることができませんでした。忙しさのゆえの放任。

(4) イスラエルの王ダビデの場合

●ダビデの息子の名は、アムノン、ダニエル、アブシャロム、アドニヤ、シェファテヤ、イテレアム、ソロモン。ただし、すべてが異母兄弟。主の道に歩んだのはソロモンただ一人。ダビデはソロモンに主の道を教えました。そのため、ソロモンは豊かな知恵が与えられ、実に聡明な王となります。しかし、人生の後半は自分の知恵に頼り、平和維持のための政略結婚によって偶像を持ち込みました。

(5) 使徒パウロの場合

●使徒パウロは生涯独身であったために、彼に子どもはいません。しかし彼には霊的な息子がいました。その名はテモテ（「信仰による真実のわが子」「私の子」と呼んでいる）です。

●以上に挙げた例を通して、子育ての難しさを覚えます。そうした中でも比較的良い例としては、ダビデのソロモンに対する教育と使徒パウロのテモテに対する教育です。使徒パウロのテモテに対する扱いは、異邦人に対する彼の態度と共通しています。パウロ自身はパリサイ人として非常に厳格な教育によって育ちながらも、その失敗の経験をベースとして、パウロはキリストを畏れる心を持ちながら、異邦人に対して、寛容、かつ柔軟な態度をとることができた人でした。そうした裏付けがテモテに対する教育の中に現わされていると思います。

2. 境界線(バンダリズ)の取り方として、適切に「ノー」と言えること

●完全な親はいません。子育ては、ある意味で、親自身の内側の問題が明らかにされると同時に、愛する能力を成長させる機会ともなります。しかし子育ての時期は、親にとって、必ずしもゆとりのある時期ではありません。むしろ、まだ親自身も自分のアイデンティティを確立していない時期でもあります。模索している時期に、子育てをしなければならぬはめになります。それゆえ、子どものそれぞれの特性をじっくり観察しながら一子どもはひとりひとり違うことに気づくこと、積極的に子どもの成長を待つことができる親は数少ないかもしれません。クリスチャンの成長を静かに見守る牧師も同様です。経験少ない牧師は信徒を早く成長させようとして失敗してしまうことが多いのです。

●ここで1冊の本を紹介しましょう。『境界線』(原題は Boundaries, 1992) 日本で翻訳されたのは、2004年です。12年経っています。これを翻訳した訳者があとがきでこう述べています。抜粋して紹介したいと思います。・・・聖書は、私たちが神に委ねられたものを責任をもって管理し、主のご栄光のために用いるようにと教えています。しかしそのためにはまず、何が自分に委ねられているのかを知らなくてはなりません。それを明確にするのが「境界線(バウンダリー)」です。・・・私たちが他の誰にも不健全に依存したり、拘束されたりすることなく、主にあって自立し、神の原理原則に従って主体的に生きていくことを実践的に教えるものです。・・・主にあって自立した生き方とは、恐れ、罪悪感、強制、妥協などではなく、愛を動機とした自由な選び取りによる関係を神と人との間に築くことだからです。そして、境界線の設定には信頼できる支援的な関係が不可欠であることが繰り返し強調されています。・・・私たちが経験する問題の多くは、さまざまな領域での境界線が曖昧であることに起因すると言われます。人はしばしば、自分の境界線の外側にあるものを支配しようとし、うまくいかずに苛立ち、疲れ果てます。また内側にあるものをないがしろにし、誰か、あるいは何かの奴隷になり、人

生の舵取りができなくなって途方に暮れます。しかし、自分の無責任の範囲を知り、神の導きに応答しつつ、それを忠実に管理することを学ぶなら、私たちは愛と喜びに満ちた真の従順の人生を生き、永遠に残る実を結ぶようになるでしょう。」

●私たちが神に委ねられたものを、責任をもって管理することの訓練とは、それは「ノー」と言えることです。それが言えるなら、決して燃え尽きることはありません。それは自分を守るだけでなく、他者に対しても、自分のある部分には入り込めない部分があるということを知らしめることになるからです。そうした境界線を自分にも相手にも意識させ、自分と他者を区別することが必要なのです。親と子どもとの関係において、特に母子関係において、この境界線が明確に意識されていなければなりません。親ができる最善なことは、子どもに自分の思いを言葉で表現するように促すことです。「いやだ」とか、「こうしたい」ということを言わせる自由を与えることです。そしてそれを言ったとしても、決して親の愛を失わないのだということを感じさせるものでなければなりません。「ノー」と言うことで親の愛を失ってしまうのではないかと子に思わせる親は、ある意味で強迫的な、罪悪感を与える誤ったかわりをしているのです。親が子どもの「ノー」を受け入れることで、子どもが親の「ノー」を受け入れることで、お互いに相手の人格を尊重することを学ぶのです。

●境界線を尊重するその第一歩は、相手の「ノー」を受け入れることです。つまり、相手の境界線に心を配ることで、子どもたちは愛されること、愛することを学ぶのです。つまり、他者の境界線を尊重することで、自分が愛されたように、他者をも愛するという基本が培われるのです。子どもたちは、自分の「ノー」が尊重されるという恵みを受けることで、それと同じ恵みを他者に対しても与えることを学ぶことができるのです。ですから親は、子どもの「ノー」に対して尊重しなければなりませんし、同時に、親も子どもに対して「ノー」と言えなければなりません。過保護の問題は、子どもに対して親の「ノー」をはっきりと言えないことにあります。そのため子どもは、一層、親に依存するようになります。自分のことを自分とするのではなく、他の者が自分の面倒を見てくれるのが当たり前と思うようになり、人のことを配慮できない自己中心的な人間となっていきます。

●祭司エリと子どもたちの関係はそういう関係ではなかったかと思います。今回の話の要点は、**「親子関係において、互いに、健全な境界線を持つこと、つまり、互いに、「ノー」と言い合える愛の関係を樹立することです。」**親は、子どもを神から預かった存在として、一人格として認めるということは、子どもの存在や成長を一様には見ないこと、子どものすることを良く見る(観察する)こと、また、子どもの「ノー」という声にも耳を傾け、「もし、そんなことでも言うものなら、私の愛を失うぞ」といった脅しや強迫めいたことを決して言わないことです。そのためには、子どもとの適度な距離を保つこと、つまり、境界線の引き方を知ることが重要です。このことが、聖書のいう「子どもをおこらせてはなりません」ということばの意味だと考えます。子どもとは従順な者だという偏見や思いこみは、互いの関係を悪化させていく道です。

●私と妻が「里親の働き」の失敗の経験を通して学んだことは、「肩の力を抜く」ということです。それは「境界線の取り方を知る」ということなのだと思います。主の赦しの中で、さまざまな失敗から多くのことを学ばせていただいていることを感謝しながら、神こそ健全な境界線を保ちながら、私たちと常にかかわって下さる方であることを告白したいと思います。